

考動・躍動・感動

現実と夢のはざままで悩みながら、、、

「大人になることは夢をすて、現実を見つめることだと思っていた。」

「夢があるから現実が見られるのだ。」

「みんなが夢ばかり追いかけていては、この世は成り立たなくなってしまう。」

「私は王様の世界より、人間の世界の方がスバラシイこともあると思った。人間には努力で積み重ねていくものがあるからだ。子どものころから培ってきたものは、何ものにも勝る財産だと思うからだ。」

おぼかたはるこ
小保方晴子さんをリーダーとする研究チームが、「STAP細胞」を開発したというニュースは、30日付けの新聞・ニュースで大きく取り上げられた。その後も続報が続いているので、みんなも知っていることでしょう。(A組の学級通信でも、詳しく紹介されました。) 専門用語がたくさん出てくるので、理解することはなかなか難しいと思いますが、画期的な研究・発見だということは伝わっているはずで

上と裏面に、小保方晴子さんが中学校2年生の時に書いたという読書感想文の一部を紹介しました。子どもから大人になる過程での心の葛藤があらわされています。しかし、こういった葛藤があったからこそ、何度も何度も失敗しながらもあきらめずに頑張りが続けたことができたのではないのでしょうか。思春期の今、様々なことに悩むことは当然ですし、悩み考えることが、自分自身を成長させていくことにもつながります。

「STAP細胞」・小保方晴子さんについて

1月29日、理化学研究所発生・再生科学総合研究センター(神戸市)の研究チーム(研究ユニットリーダー・小保方晴子さん)が「体細胞の分化状態の記憶を消去し初期化する原理を発見」したと発表。「刺激惹起(じゃつき)性多機能性獲得(STAP=スタッフ)細胞」という。これは「細胞外刺激による細胞ストレス」によって、動物の体細胞の分化の記憶を消去し、万能細胞へと初期化させる方法。これは2012年にノーベル賞を受賞した山中伸弥さん(京大教授)が作製したiPS細胞(人工多能性幹細胞)とは異なるアプローチで体細胞の万能細胞化を実現させた画期的な手法。「分化した細胞は変化しない」という常識を覆した。



【本との出会い】

今回、小保方さんが出会った本は、「ちいさなちいさな王様」(アクセル・ハッケ作)でした。たった一冊の本でも、自分の人生に大きな影響を与えることもあります。また人生とは言わなくても、自分自身の日々の生活の何かのヒントになったり、勇気を与えてくれたりすることもあります。先生自身も時間のある限り、様々なジャンルの本を読むようにしています。勉強や部活など忙しいとは思いますが、ちょっと意識的に時間を生み出して、いろいろな本に出会ってみましょう。考えが深まったり、新しい発見をしたりすることもありますよ。



大人になるのは夢捨てること、じゃない

夢を捨ててまで大人になる意味ってなんだろう。小保方さんは千葉県松戸市立第六中学校の二年生だった一九九七年、青少年読書感想文県コンクールに応募し、現実と夢のはざままで悩み、夢を実現するために努力する大切さをつづっていた。感想文は中学校の課題図書部門で県教育長賞を受賞、全国コンクールでも入選した。(砂上麻子)



小保方晴子さん

小保方さん中2の読書感想文

課題図書はドイツの作家アクセル・ハツケの「ちいさなちいさな王様」。ある日、サラリーマンの「僕」のところに指サイズの小さな王様が現れる。王様は生まれた時が一番大きく、だんだん小さな子どもになっ

ていくという物語だ。小保方さんは「ちいさな王様が教えてくれた大人になるということ」と題した感想文で、大人になる意味に疑問を投げかける。押しつぶされそうな現実から、逃げることも受け入れることもできない。大人になることは「夢を捨て、現実を見つめる事だと思っていた」と小保方さんは書く。

しかし、夢を見続け、好きなことをする王様を通して「夢があるから現実が見られるのだ」と夢の大切さに答えを求める。「小さな王様は、人間の本当の姿なのだと思う。本当はみんな王様だったのだと思う。ただ、みんな大人という仮面をかぶり、社会に適応し、現実と戦っていくうちに、忘れてしまったのだと思う」と冷静に観察する。

一方で小保方さんは夢を捨てることで、夢を持ち続けることと同じくらい大切だと気付いている。「みんなが夢ばかり追いかけている。この世は成り立たなくなってしまう」から。中二の小保方さんにまだ未来は見えない。「どちらがいいのかは、わからない。また、私がこの先どちらの道に進むのかも」と。ただ「私は王様の世界より、人間の世界の方がバラシイこともあると思う」と続く。「人間には努力で積み重ねていくものがあるからだ。子供のころから培ってきたものは、なに物にも勝る財産だと思っただ」とつづっている。

ちいさな王様が教えてくれた大人になるということ

千葉県松戸市立第六中学校

二年 小保方 晴子

私は大人になりたくない。日々感じていくことがあるからだ。それは、自分がだんだん小さくなっていくということ。もちろん体ではない。夢や心の世界がある。現実を知らればほど小さくなる

ていくのだ。私は、そんな現実から逃げて、受け入れられなくて、仕方がなかった。夢を捨ててまで大人になる意味ってなんだろう。そんな問いが頭の中をかすめていた。でも、私は答えを見つ

小保方晴子さんが中学2年生の時に書いた作文